



[令和 5 年 2 月 8 日 定例会発表要旨]

石狩 樽川の思い出

元 樽川小学校 教諭 坂口 和夫 氏

樽川との出会い… 私は昭和 20 年 8 月 14 日、山口県光海軍工廠の空襲で直撃弾を受けて家を失いました。そのとき、爆弾の破片で膝に致命的なけがを負い、治療のため伯母を頼って札幌へやって来ました。山口では“赤チン”を塗る程度の手当てしか受けられなかったからです。歩けるまでに回復した 12 月、運よく札幌一中（現 札幌南高）に編入学を果たしましたが、当時の度重なる学区制の変更に伴い、昭和 26 年に札幌北高 第一期生として卒業しました。



一度は山口へ戻りましたが、母に「恩返しをしてから帰れ」ときつくたしなめられ、同年再来札。6 月 17 日付で、石狩の樽川小学校の代用教員に採用されるというあわただしい展開でした。

樽川小学校… 樽川小学校の校舎は木造 2 階建てで 5 本のレンガの煙突を持ち、付近の家屋が平屋だったこともあり、突出してきれいだと感じました。小学校は 3 学級複式で 1 階の 3 教室を使い、2 階は花川中学校の分校が使用していました。校舎西端 1 階には校長住宅があり、その 2 階は青年団の研修等に使っていました。



昭和 26 年撮影 樽川小学校

そこで子どもたちのことばを聞いて驚きました。端々に山口訛りが聞こえるのです。山口県からの移住者の部落であったことを知り、途端に親近感を覚えました。家庭訪問などで出かけると、とくにおじいちゃんたちが親しく迎えてくれました。17 歳のときに父親に連れられてここへ来たという方もいて、私が山口訛りで話すのを喜んでくれていたようです。樽川へ来たという偶然が、後の私の暮らしを豊かにしてくれました。

樽川運河のこと… 学校の前を一方は花畔へ、一方は銭函へ通ずる道がありました。それが明治 28 年着工の運河（花畔・銭函間運河）の土手だと聞いて興味がわきました。新川との接続部にはコンクリートの造形物もありました。新川は、明治 24 年にはすでに掘削されていました。当時としては高度の技術を駆使して分水堰や閘門を設置し、小樽・札幌間の物流を支えていたそうです。周辺住民にとって土木作業は収入源となり、囚人も過酷な労働に駆り出されていたらしいと聞きました。

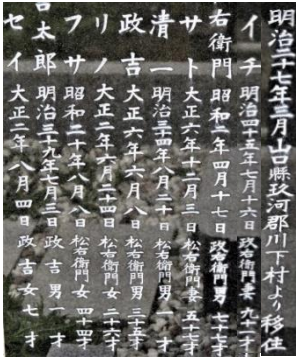
手稲山口側の運河は、現在も大事に保存されていますが（手稲山口川・山口排水川ほか）、樽川運河は新港区域内であり、ほとんど痕跡は見られません。ただ、樽川地区では国道 337 号線が一部堤防部分を走っています。かつて、銭函から石狩に通ずる道は石狩砂丘の中を歩いて、今もその跡が残ります。また新川の河口付近（小樽内川の旧流路）には朽ちかけた廃橋も架かっています。樽川に隣接する手稲山口とは、小さな小樽内川を挟んで地続きのようなところだったと思われ、オタネ浜の漁民が「山口村には寺子屋のような学校があった」と話していたことも記憶に残ります。



昭和 26 年撮影 樽川運河



昭和 27 年頃の初代「新川中央橋」



樽川墓地の碑銘より

樽川村… そんな樽川へ 明治 18 年以降、新しく山口県から移住者が来て、屯田兵村と同じように 500m 四方の土地を与えられ、開拓を進めたのです。まれに官からの炊き出しもあったとはいえ、馬の飼料にする燕麦えんばくを食べたり、やせたジャガ芋で飢えをしのいだりと、たいへんな苦勞を味わいました。樽川墓地に残る墓碑銘からも 往時を想像することができます。低年齢層の死亡が目につき、悲しい思いも重ねてこられたのでしょう。

明治 40 年の石狩町との合併後、町村農場や極東煉乳の進出もあって、樽川は酪農地帯へと発展していきました。厚い泥炭層に悩まされながら土地改良に精を出し、石狩町が灌漑用水の工事を完成させたことにより 一気に

稲作への変換が進みます。昭和 26 年頃からは稲作が中心となり、それまでの酪農中心から、水田・酪農混合経営へと移行しました。やがて水稻専業農家も増え、手稲山口の影響でスイカの生産にも精を出します。そして、昭和 46 年の石狩新港建設計画に伴って、樽川は苦難と発展の幕を閉じます。

樽川通… 樽川の名は、小樽内川にちなむものですが、手稲にも樽川通と呼ばれる道路があります。中学 2・3 年の頃、大きいリュックを背負って札幌から列車で軽川駅に来ました。踏切を渡ると、そこは“わらび”の採れる大原野でした。石狩で教師になってからは、この樽川通が札幌へ繋がる一本道になりました。当時、付近の土地を 1㎡ 100 円で買わないかと誘われたことがあります。札幌市内に転勤となり、知人に借家を見つけてもらいました。それが樽川通そばの現在地で、立派な住宅地に変わっていました。坪 10 万円の土地です。樽川の元住人は、手稲区や西区に多く転居しています。農地付きの代替地に移り住んだ人は、新しい街づくりの営みを続けています。移築した神社の祭りには旧知の人たちが集まり、境内には樽川小学校にあった二宮尊徳像も移設されています。

現在、樽川通（市道 樽川線）のほか、「樽川3号橋」という停留所もあります。昔の樽川4線通は新琴似 4 番通と繋がり、「篠路・樽川通」という名称が付けられました。札幌市内のメインストリートの一つである 麻生から中心部までの西 5 丁目通は「5 丁目・樽川通」といいます。なぜ樽川なのでしょう、不思議です。

私は、偶然出会った友人の勧めで教師になり、旧制一中の先輩であった校長の目に偶然留まったことで樽川に来て、父母の住む山口の空気を感じながら過ごしてきました。今こうして、樽川のことを振り返る機会を得たのも、おそらくは偶然の出来事なのですね。偶然の重なりが、歴史の中で自身が生かされ、新しい歴史を作る糧になってきたということを感じています。

ぶれいくたいむ

時計台で見つけたテイネ？

街なかを散策中、札幌時計台で目に留まった碑があります。今さら時計台なんてと思いながらも説明板を読むと、明治 14（1881）年の明治天皇北海道行幸の記念碑で、昭和 9（1934）年、時計台の正門前に建立されたものと判りました。道内各所にも存在する行幸碑と納得してさらに読み進めたところ、「昭和 20（1945）年の終戦直後、連合軍の進駐前に撤去…永らく所在不明…昭和末期に中島公園管理事務所で発見…その後は手稲記念館で保管…」とあります。

ん？ 手稲記念館！ さっそく市に問い合わせました。すると、行幸から 140 年の節目にあたる 令和 3（2021）年の 9 月 11 日夜、西区の同記念館から現在地に移して再建立したとのこと。碑が表舞台に復帰した時期の札幌は 未曾有のコロナ禍で人出も少なく、この出来事はあまり知られていないでしょう。

さて、手稲記念館には 他にもお宝が？ 岩井弘行（手稲郷土史研究会 会員）



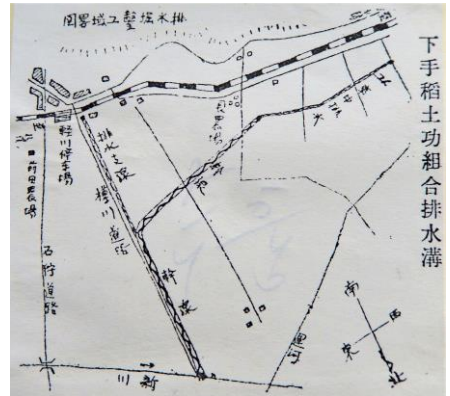
明治天皇聖蹟碑

「曙」の歴史秘話（1）

▶ 曙の名は 隣組から始まった…

行政地名（住居表示）としての「曙」^{あけぼの}は、昭和 58（1983）年に行われた町名整備の際、それまでの「手稲稲穂」と「手稲山口」の一部が分割・統合されて定められたものです。地名はもともと昭和の戦時下、防火訓練などのために設けられた隣組^{とどろぐみ}の呼称だったといい、「将来、ほのぼのと明けていくようにという願いをこめた」と、命名者の久木宇吉氏は述懐しています。

明治期のこのあたりの歴史は詳らかではありませんが、現在、住宅が建ち並ぶ市道「樽川線」^{たるかわ}沿線から市道「曙線」沿線にかけては、大正 5（1916）年頃になっても荒蕪とした原野が広がり、農家が数戸点在しているだけでした。泥炭土壌で水捌けが悪く、農地には不向きだったためです。そこで、「下手稲土功組合」が組織され、大正 12（1923）年 10 月、難工事の末に排水路が完成。一帯はようやく耕作可能な土地になりました。この水路はいまでも「手稲土功川」として曙地区を流れています。※「土功排水」の竣工について、既出文献では大正 13 年または 14 年とされていますが、大正 12 年 10 月 20 日および 21 日付『北海タイムス』紙上において「下手稲土功排水溝竣工式輕川にて舉行」などの記事（札幌市公文書館 所蔵資料）が確認できました。



大正 12 年 10 月 20 日付
「北海タイムス」掲載の排水溝の図
（札幌市公文書館 所蔵資料より）



都市計画道路「曲長通」標識
（曲長通跨線橋にて）



市道「曲長線」に立つバス停
（曙 2 条 4・5 丁目）

▶ まぎらわしい？「曲長通」…

読み方が難しいことで知られる道路に「曲長通」^{かねちようどおり}があります。明治 37（1904）年に開かれ、昭和 10（1935）年頃まで 現在の手稲区土木センターや 運転免許試験場付近に広がっていた「本間長助農場」^{ほんまなちゆうすけ}の印「長」^{しんし}（カネチョウ）に由来する名称ですが、都市計画道路の「曲長通」のほかにも市道「曲長線」も存在しています。しかも、この市道沿いには「曲長通」というバス停があり、まぎらわしい…。なぜでしょう。実は JR 稲穂駅の北側から かつての農場へと向かう この道こそ、大正 9（1920）年に村道として認定された 本来の曲長通で、バス停にその痕跡が残されていたのです。

そもそも「長」本間は、明治 9（1876）年創業の 札幌屈指の醸造家でした。『金麗』^{きんれい}の銘柄で、石造りの酒蔵が南 3 条東 2 丁目に並んでいたそうで、その蔵は、昭和 26（1951）年に公開された 黒澤明監督の映画『白痴』の重要な舞台としても使われています。なお、本間農場の土地はその後、三菱鉱業株式会社に売却されて「手稲鉱山」の“鉱滓沈殿池”となりました。

▶ 幻の飛行場…

現在の曙 3～4 条 1 丁目付近には、かつて飛行場がありました。昭和 5（1930）年、北海タイムス社が「北日本飛行学校」を開校。大きな格納庫を備え、練習機が爆音を響かせていました。ところが機体は その大部分が木と布で造られたもので軽く、飛行場も草を刈っただけの ほぼ原野という凸凹の状態だったため、着陸時には つまずいて一回転することもよくあったそうです。「まるでスローモーションの映画みたいに トンボ返りした」との回顧談が残っています。また冬は、車輪をスキーに履き替えて 離着陸していました。

昭和 8（1933）年、「札幌飛行場」（現在の北 24 条西 8 丁目周辺）の完成に伴い 学校は移転。わずか 3 年余で飛行場も閉鎖されました。



昭和 5 年撮影？ 練習機披露
（手稲区ホームページより）



撮影年不詳 軽川の飛行機操縦訓練所
（札幌市手稲記念館 所蔵）

▶「拓北農兵隊」の入植…

昭和20(1945)年7月、「拓北農兵隊」の一行が^{たくほくのうへいたい}軽川駅(現手稲駅)に降り立ちました。空襲や強制疎開で家屋を失った東京都民を対象とする「北海道集団帰農者募集」に応じた杉並区の人たちです。

当時14歳で家族と共に来道した田中篤之助氏の手記によると、軽川国民学校(現在の手稲中央小学校)で休憩し、「藤の湯」で入浴したのち手稲神社での入植式に臨み、ようやく仮宿舍へ到着すると、そこは牛舎を改造したものでした。終戦間際の混乱期に受け入れ態勢



昭和18年頃撮影
拓北農兵隊の仮宿舍となる牛舎
(手稲郷土史研究会『ていね〜たゆまざる歩み』より)

も整わないまま進められた事業とはいえ、「希望に燃ゆる新天地」という謳い文句とのあまりのの違いに、落胆したといえます。会社員、役人、大工、警察官、指物師など、それまで農業とは全く無縁だった人たちがさっそく翌日から援農や菜園耕作、材木伐採などに就き、同年11月、17戸が樽川通(現在の曙地区および前田地区の一部)に建てた住居へと移り住みました。しかし、あてがわれた土地は必ずしも農作適地といえず、開墾は困難の連続でした。



昭和32年撮影
手稲山を背に春耕する入植者
(田中篤之助『白雲を眺めて』より)

やがて、「農業が立ちゆかないのなら“まち”をつくろう」と転業して成功し、部落に貢献する人も現われるようになります。いまの曙地区のすがたは、かかる人びとの苦労の上に成り立っていることを心に刻んでおきたいものです。

▶ワラビで直した樽川通…

農業従事者を苦しめた泥炭地は、一方でワラビの自生地として知られ、季節になると札幌近郊からおおぜいが押し寄せたそうです。同じ頃、周辺には細い馬車道が一本あるだけで、しかも雨が降るとぬかるんで通行できない状況でした。道路を直したくても、村にも部落にも余裕はありません。

そこで一計を案じ、「ワラビ採り」に入場料 ※当初は一人5銭、最後の徴収となった昭和19(1944)年には20銭を課して、道路の修理費に充てることとしました。はじめは当別村から仕入れた砂利を敷き、のちには「手稲鉱山」のズリ山の碎石を運び入れて、樽川通(現在の市道「樽川線」)を改良していきました。

[編責: 広報部]

*参考文献: 札幌市『手稲町誌』(下)、手稲連合町内会連絡協議会・手稲鉄北連合町内会連絡協議会『手稲開基110年誌 手稲の今昔』、札幌市手稲区『手稲でみつけた手稲のはなし』、同『手稲区ガイド』、同『手稲区歴史ガイドマップ』、田中篤之助『白雲を眺めて』、茂内義雄『札幌のむかしばなし 小学校地域資料集』、東宮駐輦記碑移設委員会『知られざる手稲と加賀百万石〜手稲前田と前田農場〜』、手稲郷土史研究会『史料に見る手稲今昔〜手稲歴史年表』、同『ていね〜たゆまざる歩み』、札幌建築鑑賞会「札幌百科 巨匠クロサワは札幌で何を観たか?」、ほか。



★定期総会のご案内 手稲郷土史研究会の令和5年度定期総会を、4月12日(水)午後6時15分より、手稲区民センター2階の第1・第2会議室で開催します。別途、案内状を郵送しますので、出席の有無をお知らせ願います(欠席の場合は委任状)。当日はマスクをご着用ください。なお、終了後には飲食を伴う懇親会などは行いません。

★資料提供の協力 1月下旬、発寒歴史散歩倶楽部(国田洋治代表)主催による「発寒の今昔写真展」がはっさむ地区センターで開催され、手稲郷土史研究会が所蔵する写真を展示協力しました。また、手稲区富丘連合町内会(久瀧洲一 会長)が3月下旬に発行する創立50周年記念誌『とみおか』に、当研究会がまとめた富丘地区に関する歴史資料を提供しました。